

心理的安全性とは

私は、校長室だよりや講話の中で、時々「心理的安全性」という言葉を使っています。「心理的安全性」は、アメリカのハーバード・ビジネス・スクール教授のエイミー・C・エドモンドソンが提唱しています。

その理論は、「チーム内で率直な意見や失敗の共有が安心してできる環境が、学習とパフォーマンス向上に不可欠である」としました。病院でのチームワークと医療ミスとの関係を研究した結果、「優れたチームほどミスを報告しやすい傾向がある。これは『報告しても安全だと思える環境』があるからだ。心理的安全性は個人の性格ではなく、チームや組織の『雰囲気』『規範』『風土』といった集団的な特性に根ざす。心理的安全性が高まれば、メンバーが安心して意見を述べられることで、意思決定の質が向上し、失敗からの学習が促進され、イノベーションや創造性が高まる」としています。

当校でも、こういった学級や組織を目指していきたいと思っています。学校で言う心理的安全性とは、児童生徒が「ここにいても大丈夫」と感じられることです。児童生徒は毎日たくさんの挑戦をしています。分からない問題に向き合うこと、友だちに意見を伝えること、失敗しながら新しいことを学ぶこと、そのどれもが、安心できる環境の中ではじめて力を発揮できるものです。

逆に、「間違ったら笑われるかも」「先生に怒られるかも」と不安を感じてしまうと、子どもは本来もっている力を十分に発揮できません。安心感は、学びや成長の「土台」となります。

それはまた、校長室だより第37号のリーダー研修会の内容でも紹介した「ミスは起こりうるもの、ミスがあったとしてもみんなですらにそれに対処する力が組織にあるかが求められている」という考え方もあります。

学校の授業の様子を思い浮かべてください。「月刊生徒指導」という教育雑誌にあった、ある教師からの相談内容です。

小学校の中学年を担当しています。例えば、算数の授業で「問題の答えを発表してくれる人？」と尋ねると、「ハイ、ハイ」と次々手が上がります。心理的安全性が確保されているなど感じていました。しかし、国語の話し合い活動で、「学級をより良くするためには」というテーマで話し合いをしたのですが、全然手が上がりません。「思ったことを言えればいいんだよ」と促しますが、一向に手が上がりません。下を向いている子、ちらちら私の方を見ている子、そんな子ばかりです。

なぜ手が上がらなかったのか？結論から言うと心理的安全性が低かったからです。「安心して意見を述べる雰囲気がなかった」と言えます。では、なぜ算数の授業では手が上がったのか？それは「答えることが決まっている」からなのです。「学級をより良くするためには」の問いには正解がありません。自分の考えたことに対して絶対的な自信を持つことができないのです。「この意見を言って、友達に反対されたいやだな」と思い、躊躇(ちゅうちょ)しているのです。またこれをある行動に置き換えると、「失敗したら笑われる、恥ずかしい、目立ってしまう」と思えば、やってみようとはしなくなるともいえます。



心理的安全性が高い環境では、子どもは次のような姿を見せやすくなります。

- 分からないときには「分からない」と言える
- 失敗しても、次にどうすればよいかを考えられる
- 自分の意見を言いやすくなる
- 友だちの考えも受け入れやすくなる



心理的安全性を高めるのは、集団生活をする学校が主だとは思いますが、家庭でもご協力をいただけると一層高まるのではないかと考えます。

学校で大切にしていきたいこと

「月刊生徒指導」では、教師が心理的安全性を高めるための声掛け方を説明していました。

○望ましい行動をほめる

教師は、子どもの望ましくない行動に着目してしまいがちです。しかし、望ましい行動を注視し、声掛けをすることで、ほめられた子だけでなく、学級全体に安心感が広がります。

○子ども自身に気付かせる

例えば、給食の配膳台が準備できていないとします。教師が「用意をなさい」と言うのは簡単です。しかし「何が足りないでしょう」と尋ね、子どもに発言させることで、気兼ねなく意見を言える雰囲気づくりをします。

○指導はユーモアを交える

必ず、子どもを指導する場面が訪れます。しかし、ときにはユーモアを交えた指導も有効です。例えば「今からヘリコプターでとってきなさい」などという声掛けです。忘れ物というネガティブな状況が、笑いに代わります。

→この3つの声掛け法、「教師」を「親」に変えてみたらどうでしょうか？

ご家庭でできる、小さな「心理的安全性」づくり

保護者の皆さまの温かい言葉が、子どもたちの心を大きく支えます。家庭で取り入れやすい工夫をいくつかご紹介します。生成AIからヒントももらいました。

- 子どもの話を、否定せずにまず聴く
- 結果よりも、気持ちや過程に目を向ける
- 失敗しても責められない家庭であること
- 学校や先生への強い否定的な言葉は控える
- 気になることは早めに学校へ相談する
- 家庭と学校は子どもを支えるチームであると伝える



ちょっとした一言や態度が、子どもの安心感につながります。

最近、ほんの一部の子どもたちの声ですが、「家で私の話を聞いてもらえない」「一方的に親の言うことを聞かされる」「『困った』と言えない」と聞かことがあります。生徒の言うことがどこまで本当なのか、忖度しているのではと思いますが、もし、そのような状況があれば、生徒が成長しようとする姿を邪魔していないかと心配になります。

子どもたちが安心して「その子らしく」いられるために

大人が安心感を示すと、子どもたちは驚くほど柔らかく心を開き、挑戦する力を伸ばしていきます。ここで言う「安心感」とは「何かあっても、学校と一緒に考えてもらえると思えること」と生成AIは説明しています。そういった学校を目指さなければならないと思います。

学校と家庭が同じ方向を向き、子どもたちの「その子らしさ」を認め合いながら育てていくことで、安心して学び、安心して成長できる環境が生まれると思います。